

農業技術開発の現状と食の安全・安心

久野秀二（京都大学大学院経済学研究科）

1. はじめに——科学技術と社会の不幸な対立

○なぜ社会学者が「農業技術」に注目するのか？

- 科学技術と社会の関係性——「研究開発の成果（科学技術）が社会に及ぼす影響の大きさ」「一連の社会的選択プロセスである研究開発の成果（科学技術）」
- 社会に埋め込まれている科学技術を社会から切り離そうとする言説に対する「再埋め込み」のための論陣

○科学技術のリスクをどう捉えるか？

- リスクへの漠然とした不安——市民の「科学リテラシー」を要求する PA 活動の意義と限界
- リスク評価への不安——科学的に検証可能で技術的に回避可能なリスクか否か：「科学の不確実性」への視点
- リスク管理への不信——リスク評価の健全性を担保し、リスクを制度的に回避する「制度設計」のあり方への視点
- リスクコミュニケーション——市民の「科学リテラシー」と科学者の「社会リテラシー」との双方向的で建設的な関係への視点
- リスクガバナンスから科学技術ガバナンスへ——「技術設計」への異議申し立て

2. 遺伝子組換え技術と食品リスク・環境リスク——求められているのは「リスクの科学」だけなのか？

○国際的規制枠組みの現状

- 生物多様性条約カルタヘナ議定書 vs. WTO 協定・自由貿易原則
- コーデックス委員会に委ねられる「科学的根拠」への合意形成
- 予防（事前警戒）原則、社会経済的・倫理的側面への配慮
- WTO 紛争パネル中間報告の波紋

○リスクの評価と管理は十分に行われているのか？

- 食品リスク：コーデックス委員会で詳細なルールを継続審議中
- 環境リスク：カルタヘナ議定書に基づく各国の法整備はなお途上
- 共存可能性の模索：欧州各国で具体化作業中、市民社会組織からの批判
- 米国の規制政策への疑問：開発企業の「自主規制」、内部監査で露呈した機能不全のリスク管理

3. 遺伝子組換え技術と社会経済リスク——農業のあり方も問われている

- なぜ GMO の栽培は「世界中で拡大」しているのか？
 - 市場競争下で進む農民層分解と「踏み車の論理」
 - 種子市場・農薬市場の寡占化
 - アグレッシブ・マーケティングと「情報の非対称性」
 - 政策的支援
- 生産現場で何が起きているのか？
 - 米国の場合：除草剤耐性雑草の出現——短期的・一面的な問題解決技術、近代農業パラダイムの無批判的継続の必然的帰結
 - アルゼンチンの場合：経済の「大豆化」がもたらす社会的混乱と環境リスク——米国型と途上国型の二重の GMO 問題構造
 - インドの場合：農家負債をもたらした GM 作物（害虫抵抗性綿花）の導入——アグレッシブ・マーケティングの帰結
 - 南アフリカの場合：見当違いの生産技術（害虫抵抗性綿花）——国際綿花市場を歪曲する政治経済力学を無視した途上国型 GMO の「モデルケース」
- どのような農業を目指すのか？
 - これらの社会経済リスクは、必ずしも GMO に固有ではない → だからといって、GMO の評価にあたって考慮する必要がないと言えるのか？
 - 農業技術は実験室・実験圃場のパフォーマンスだけで評価されるものではない。当該技術がどのような生産方法（栽培体系）を前提に考えられ、導入され、帰結しているのか？
 - GMO に反対する市民社会組織・農民組織が対置する「農と食のあるべき姿」
 - 共存方策をどう考えたらよいのか？

4. 農業科学技術の豊かな（民主的な）発展は可能か？

- GMO のリスクガバナンス——who, when, what, why, how
 - 技術の評価視点： $G \times E \times P \times M$
 - 多様な専門性の総合と市民の参加
 - リスクの政治化
- GM 技術の将来可能性をどう考えるか？
 - 環境ストレス耐性（冷害、乾燥、塩類土壌 etc）
 - 第2世代（機能性）、第3世代 GMO（非食品原料）
 - バイオテクノロジーを作り替えることは可能か？